「思想とは、行動なり」の教え

あるメル友から、【　校長先生からでた話です。今養護学校判定を受けてはいますが、ご両親の希望により特殊学級に在籍している子が〇名います。その子を養護学校にまわすべきだという話がでました。というのは今、通常から〇人の子を特殊学級にまわしたいという話があるのですが、こちらの手が足りず受け入れの体制がとれない状態なのです。それは特別支援としての機能を果たしているとはいえないとのことでした。たしかに校内に苦しんでいる子がいてその子たちを助けてあげられない状態にある今の現状は悪いです。だからといって子供をたらいまわしにするしかないのかと思うと本当に悲しくなりました。何かを変えなければならないのは事実なのですが…。自分に何ができるのか、何が子どものためになるのか、難しいですね。　】とのメール。

いつものように私なりに厚かましく大人側の体制を改善すればいいだけの話と、メル友には既に返信した。

こうした話を聞くと思い出すのは、恩師である元院長。学齢期の長期入院の子どもの医療費補助のない時代に、国立の病院長だけに自分の雇い主であるにも拘わらず当時の厚生省、大蔵省に、勤務後親たちと共に夜行列車に乗り、陳情にタスキをかけて何度も出かけた。それが今の「育成医療制度」。これ以外にも、治らない病気故に入院を拒否されていた筋ジスを入院させ、同様に親たちと陳情を繰り返し、それが今の筋ジスの子どもたちの入院制度を産んだ。元院長は、弱い立場の子どもや親の方にしわ寄せしての解決策を決して考えはしなかった。

こうした元院長の思考方向、そうそう簡単には諦めず何年かかろうと、次々と解決への工夫策を考え、かつ行動を目にしている私だけに、前述の校長、職員集団のように、直ぐに安易な方策で解決する話は納得できない。

どうして地域の学校に通わせたいと願う親と一緒に、教育委員会へ職員増等の要請に出向かないのだろうか。

元院長は、我が身を省みずに雇い主にすら「子どもや親のために」発言し、行動した。それだけに、校長、教師集団に、「どちらを向いて教育を考えているの？」と一人一人に私は尋ねてみたくなる。

元院長の口癖は、「制度は人が作ったもの。子どもや親に不都合が生じれば、一緒に考えて作り直せばいい。」であった。現場教師だけが苦悩するのではなく、親も行政も「一緒に前向きに考える場」が必要な気がする。

（2004 年 12 月 14 日　記）